第二十講　日本文化論・音楽論

「能」や「間（ま）」と謂（い）うような［ X ］なことばが、すげなく簡明にただひとつの音で表わされる日本語。平常それを用いている私たち日本人の、他民族とは異った好みや慣習。人間が創りだしたり表わしたりするものの悉（ことごと）くは、そうした言語や習俗を離れて在ることはない。西洋と東洋と謂う区分は雑駁（ざっぱく）に過ぎて嫌だが、機構的に最も単純な笛一管を例にとっても、そこに各民族、各地域社会の好みや習俗の隔たり、文化の表情の微妙な差異を聴くことができる。そして今日（いま）は、人類が生みだした文化の水脈が相互に影響し合いながら、私たちの生活（くらし）のただ中に渾然と渦巻いて在る。しかし、それだからいっそう、私たちには振り返らねば見えないような過去ではない、この瞬間の現実を支えて生きている過去を学ぶことが重要になってきた。たしかに人類は、日々共通の言語を目指し歩み進んでいるが、日本の音を、それが求めもしない西洋の形式に無体にも封じこめようとするような不自然なことをするまえに、民族の感受性や美意識、それを培った異質の風土から生まれた固有の文化の、相互に異る相貌（すがた）を明らかにし、確かめなければならないと思う。

日本人の芸術表現について考えてみると、[A]西洋人は、自然の中にその類型を見出すことができないようなものとしての人工（表現）を珍重するが、私たち日本人は、作りだすもの（表現）に、自然と同質を見て喜ぶ向きがあるように思う。このことは、音の嗜好にも当てはまる。西洋音楽は、雑音的なものを排除することを、歴史的に推しすすめてきた。だが、西洋近代音楽の周縁に今日もなお存在する多くの民族（民俗）音楽は、その騒音や雑音の使い方、混ぜ方の工合いによって固有の音楽を創造している。そして、日本人は、自然の雑音に対して、それとはまた別の、独自の美的態度を所有しているように思う。わが国の芸能の概ねは、かつて大陸や半島から渡来したものであり、後にそれらは、禅や仏教その他の影響によって独自の日本化を示したのであるが、その日本化の著しい特徴は、たとえば、移入された音階や律動のような音楽的主要素を基に新たに展開すると謂うのではなく、音楽表現上の音階や律動等はそのままにして、それよりむしろ楽器の音色（ねいろ）のひとつひとつを新たに深めて行くような傾向を示した。それは、中国の刺繍や彫刻等が、素材に対して極めて人工的な加工を施すのとは反対に、自然の素材を可能なかぎり元のままに据（お）こうとする態度に近い。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

私は常々、邦楽の演奏家と接している中で、日本人は音によって表現(あらわ)そうとするより、音を聴きだそうとすることを重んじているのではないか、と感じることがある。「間(ま)」とか「さわり」のようなことばは、表現における実際的な技術上の意味を示すものでありながら、同時にそれは、[Y]な美的観念でもある。さらに、「一音成仏」というような思惟を生みだしているのは、日本人が、音によって表現(あらわ)すのではなく、音本然の貌(すがた)を聴くことに重きを置いたからではないか、と思う。日本人は、[B]自然の騒音や雑音を単なる表現上の素材として外在するものとしては観ずに、世界の全相をそこに映すものとして把えたのだ。そうした美意識が、能のような高度な芸術をつくりあげた。

世阿弥が創出した夢幻能のように、一人の演技者の中に集約されるような形での劇(ドラマ)は、西洋近代劇に見られるような、他（相手役）との葛藤というものの上に成り立つ演劇とはかなり異る。「伊勢物語」に取材し案出された「井筒」では、ひとりの純情な美しい女と、業平との恒久的な恋物語と謂う体裁を表面にもちながら、一方でこのシテは、「人待つ女」と呼ばれるように、永久に相手を待つ存在として設定されている。（余談ながら「劇とは何事かが起るものであり、能とは何人かが現われるものだ。」と評した、ポール・クローデルの言葉が思いだされる。）後半で、女は恋人の衣裳を身にまとい、相手と一体化し、そうした、意味の重層性が、きわめて官能的であでやかな世界を形づくる。しかも、[C]さらにおもしろいのは、ここでは、男である能役者が女に扮し、その女が男の格好をしているということだ。それは、単に倒錯的な美を感じさせるばかりではない。西洋の劇とは異る独特な劇空間、——劇的な状況(シチュエーション)というものではなく、そこに非現実な時空を現出する。これは、日本語が人称を省略して成り立つことばであることと深い係わりがあるように思う。そしてその総ては、日本人の自然との係わりかたに由来しているように思われる。

現代において、稀有な能役者であった観世寿夫(かんぜひさお)氏と話した機(おり)、氏は、「日本の場合はあらゆる文化の中で自然の捉えかた、自然との係わり合いの問題がたいへん大きい。能に顕(あらわ)れる自然観にしても、人間と対抗する自然というものではない。〈自然〉ということばは、中世では〈フト〉という意味に使われていた。〈自然(フト)何とかしたときに来てください〉と謂うように用いられる。したがって自然というものは人間と対立するものとしてあるのではなく、何かのときにフト出遇うもので、それが音と音との間(ま)というような把えかたに、考え方として影響しているだろう。」と述べられていた。

そして、日本文化の根底にある[甲]と謂うものは諦(あきら)めの思念(おもい)ではなく、ただ一刻も同じではありえない変転する自然（時空）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

にたいして、フト出会う人間の生（人生）を、積極的に肯定する思想なのだと語られたのが、強く印象に残っている。

また、能の面（おもて）の、他民族の仮面劇等に比してきわめて特殊な有様（ありよう）も、そうした自然観と係わりをもつようである。面はたんにその役に扮するためのものではなく、感情や情況を［Z］に表現できる顔の表情を封じることで、かえって純粋な能役者の内面表出を可能にする。観世寿夫氏は、「真の表現を求めるために、わざわざ面をかけると謂うことが言える。表面的な演技を削りとっていって、しかもそれをつき抜けて顕れる内面的なものを要求している。」と語っている。

樹が、地や風の震動を天へ向けて伝えるように、能の面は、より純粋な生の気配、死の淵にたちこめる夢を伝える。

（武満　徹『音楽の余白から』）

問１　空欄［X］／［Y］／［Z］に入る語として最も適当なものを次からそれぞれ一つずつ選べ。

①　一義的　②　間接的　③　形而下的　④　形而上的
⑤　多義的　⑥　直接的　⑦　内面的

問２　傍線Bの「自然の騒音や雑音を単なる表現上の素材として外在するものとしては観ずに、世界の全相をそこに映すものとして把えた」とはどのようなことか。最も適当なものを次から一つ選べ。

①　自然の騒音や雑音のありのままを美と考え、それらをそのまま再現することで音楽が成り立つと考えた。
②　自然の騒音や雑音の中から、日本の固有の音階や律動を見いだし、前面に出すことで日本的な感覚の全体を表現した。
③　自然の騒音や雑音の中に、世界を表す音楽として純化されるべき音の最初の姿を見いだした。
④　自然の騒音や雑音を、音階や律動を介して音楽の音と関連づけることで、音楽を世界全体に結びつけた。
⑤　自然の騒音や雑音を排除せず深化させてとらえれば、そこに人間と自然が集約的に現れると考えた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問３　傍線Ｃに「さらにおもしろいのは、ここでは、男である能役者が女に扮し、その女が男の格好をしているということだ」とあるが、ここで筆者はどのような点をおもしろいと思っているのか。最も適当なものを次から一つ選べ。

①　演技者を一人に集約することは、夢幻能を構成するための技巧として、それまでにない奇想天外な方法であること。
②　男が男でなく、女が女でないというように、事実が二重に否定されることで、非現実感が増してくること。
③　純清な女が一念を貫くことで、相手の男とついに一体化するにいたる結末がよく表されていること。
④　性が二重に逆転されることで、倒錯的な美が一層強く醸し出され、官能的な世界が形づくられること。
⑤　男女が重なり合って同一となる点に、自他の区別と対立を超えた非西欧的な演劇世界が現れていること。

問４　空欄［甲］に入る語として最も適当なものを次から一つ選べ。

①　無常観　②　他界観　③　人生観　④宗教観　⑤　自然観

問５　傍線Ａに該当するような芸術表現として、本文中にとりあげられている音楽と能の例以外には、どのようなものが考えられるか。具体的な例を一つあげ、七十字以上百字以内で説明せよ。なお、句読点やカギ括弧などもそれぞれ一字と数える。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●武満徹＝たけみつ　とおる（一九三〇～一九九六年）作曲家、音楽理論家。

●世阿弥＝ぜあみ→室町時代の能役者、能作者、能の理論家。

『風姿花伝（花伝書）』にて「幽玄（ゆうげん→奥深い情緒）」「物真似」などの芸能の本質を語っている

●『伊勢物語』＝いせものがたり→平安時代の歌物語。作者は不明だが、主人公は在原業平（ありわらのなりひら）。

「恋愛のデパート」とも言われる

語句

すげない＝素気無い→そっけない・シンプル

雑駁＝ざっぱく→雑多でまとまりがない・大雑把

渾然＝こんぜん→本来別々なものがまざりあうこと・混然　　類義語　渾沌（こんとん）

無体＝むたい→無法で道理にあわないこと

能＝のう→室町時代に観阿弥と世阿弥の父子により大成された芸能。仮面をつけ囃子（はやし）にのって舞うのが一般的

葛藤＝かっとう→対立や複雑なからみあい、またそこから来る悩み

倒錯＝とうさく→正常とは逆、反道徳。アブノーマル

無常＝むじょう→永遠不変なものはなく、すべてのものが変化する　　cf「無情」はおもいやりがないこと

形而上＝けいじじょう→メタフィジックス・形を超えた目に見えない本質・形而上学は哲学とほぼ同義語

形而下＝けいじか→フィジックス・形あるもの・物理学の領域

官能＝かんのう→性的感覚を刺激する

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第二十講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）伝統的な文化やシュウゾクを研究　①族　②属　③俗　④続　⑤賊

（イ）日本のコユウの音楽文化を創造　①個　②固　③古　④児　⑤小

（ウ）人工的な表現をチンチョウする　①珍　②陳　③賃　④鎮　⑤朕

（エ）西洋音楽のシュウエンにある　①遠　②焉　③園　④縁　⑤宴

（オ）日本的な律動やオンカイを表現　①界　②階　③改　④快　⑤解

（カ）世界のゼンソウをそこに映す　①層　②装　③総　④想　⑤相

（キ）心のカットウを伝える　①藤　②頭　③問　④当　⑤唐

（ク）トウサク的な美意識の表現　①盗　②等　③倒　④投　⑤党

（ケ）舞台の上で役にフンする　①分　②粉　③墳　④扮　⑤奮

（コ）大地や風のシンドウを感じる　①新　②振　③震　④深　⑤芯

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十講　日本文化論・音楽論

《本文の対比構造》

主役

日本文化＝人工物や表現に自然との同質性を求める／変転する自然を肯定する自然観

主な対比

比較相手その1

西洋文化＝自然と異なるものとしての人工表現重視／雑音の排除／自然を人間と対立するものとみる自然観

小さな対比

比較相手その2

西洋近代音楽の周縁の民族音楽

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

Ｘは、直後の「すげなく（シンプルに）簡明にただひとつの音」との対比になります。したがって⑤の「多義的」になります。たとえば「間」は、空間の意味でも時間の意味でも、人間関係についても使われる、意味の多いことばです。Ｙは、「観念（アイディア・頭の中の思考内容）」とセットになっていること、次の文で「本然の（本質・本来的なもの）貌（すがた）」と言い換えられていること、直前の「実際的な技術上の意味」と対比になること、以上から④の「形而上（けいじじょう）的」を選びます。カタチや物理現象（フィジックス）を超えた本質を意味する「メタ・フィジックス」の訳語です。評論・論説文を読むうえでは欠かせない知識です。よく覚えておいてください。Ｚは、「顔の表情」「表面的な演技」に関わるものですから⑥の「直接的」です。能面はそれらをあえて封じて、「内面」の表出をめざしているのです。

問２《傍線部説明・選択肢》

日本の美学の説明です。①は、「自然の素材を可能なかぎり元のまま」という本文の記述に合致しているように見えますが、さらに「深めて行く」のが日本の美学です。しがって「そのまま再現（リピート）」では、記述に反する誤りとなります。②は、まず「前面に出す」が×です。「前面⟷背景」というような対比はないからです。ゆえに正しい対比喪失の誤りです。また「日本の固有の音階や律動を見いだし」も×です。これでは、例えば雨音の中から「日本的なリズム」を発見するかのようですよ。そうではなく、自然の音を深く聞く、その聞き方に日本人ならではの特徴があると語られているのです。この点では記述に反する誤りです。③は、「純化」が「雑音的なものを排除」する西洋側のキーワードになり、対比混乱の誤りとなります。④は、「騒音〜音階〜関連づける」が、「騒音〜混ぜ方の工合い」を特徴とする「西洋の周縁の民族音楽」の言い換えとなってしまいます。したがって、これも対比混乱の誤りです。したがって⑤が正解。

問３《傍線部説明・選択肢》

日本の美学を代表する能に見られる「集約」「意味の重層性」の説明部分です。詳しく言えば、戸籍上あるいは生物学的に

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

は「男性」である能役者が、舞台上で「女」を演じる。さらに待ち焦がれる相手（在原業平）の衣裳を身にまとう、という二つの重ね合わせがあるのです。また、相手との葛藤（対立）を特徴とする西洋近代劇との対比ともなります。したがって⑤が正解。①は、「技巧（技術）」はむしろ西洋的な特徴で対比混乱の誤りといえます。また「それまでにない」が正しい対比喪失の誤りです。「かつて⟷いま」という対比ではないからです。②は、「二重に否定」が×です。正しくは「二重に肯定」です。記述に反する誤りです。③は、二重の重ね合わせの内、「相手の男」の衣裳を重ねる点だけになっています。部分的指摘の誤りです。さらに「結末⟷オープニング」は、比べられていないゆえ、正しい対比喪失の誤りです。④は「二重に逆転」が、②の「二重に否定」と同様に記述に反する誤りです。また「倒錯的な美が一層強く」は対比混乱の誤りです。本文では「単に倒錯的～ばかりではない」と乗り越えていますから。

問４《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

⑤の「自然観」を選んでしまいがちですが、西洋にも西洋流の「自然観」がある以上、日本文化の特徴を答えることになりません。変化・変転する自然を肯定するものです。したがって①の「無常観」となります。なにものも今ある状態を保ちえない、儚（はかな）いものという意味です。つい否定的に「諦め」と考えがちですが、本文ではポジティブに評価しています。

問５《主題理解・記述》

西洋側は、自然そのままではない人工加工重視、一方日本側は、自然との同質性・親近性重視、という方向で、さまざまな芸術表現を考えてみましょう。解答例を参考にしてください。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

模範解答

問１　X＝⑤　Y＝④　Z＝⑥　問２＝⑤　問３＝⑤　問４＝①

問５

解答例１―庭園　西洋の庭園は、植物など自然素材を使っても、人工的な加工を施した幾何学的・直線的な形態をとるのに対し、日本の庭園は、自然の景観の借景をとりいれるなど、自然との同一性・連続性をもつ。（八十九字）

解答例２―花

西洋――フラワーアレンジメント―加工

日本――華道・茶道―一輪の花に四季・自然の象徴をみる

解答例３―文学・詩

西洋――人間の営み、とくに傑出した英雄の活躍を詠む叙事詩の伝統

日本――自然を詠み、それとともにある感受性を主とする抒情詩の伝統・和歌・俳句

解答例４―建築

西洋――城壁によってかこまれた都市・強固な壁をもち、外部と隔絶した住宅

日本――庭や自然との連続性、借景をとりいれた住宅

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第二十講

（ア）③
（イ）②
（ウ）①
（エ）④
（オ）②
（カ）⑤
（キ）①
（ク）③
（ケ）④
（コ）③

解答漢字一覧

（ア）習俗
（イ）固有
（ウ）珍重
（エ）周縁
（オ）音階
（カ）全相
（キ）葛藤
（ク）倒錯
（ケ）扮
（コ）震動

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。